

The Japanese Group Dynamics Association

<http://www.groupdynamics.gr.jp/>

第 62 号

(2023 年 1 月 25 日)

発行所：東洋大学 北村英哉研究室

日本グループ・ダイナミックス学会

E-mail：sec-general@groupdynamics.gr.jp

発行人：北村英哉

編集担当：藤村まこと

目次

最初で最後ではなかったオンライン大会を振り返って	2
大会準備委員会企画シンポジウム	5
「実験・実践のリアリティと社会のアクチュアリティ ー再現可能な一般性の発見と個別性からの普遍性の追求のあいだでー」	
コラボ・リクエスト企画シンポジウム	7
優秀論文賞	8
2022 年度優秀学会発表賞 選考結果のご報告	11
機関誌『実験社会心理学研究』について	18
実験社会心理学研究 2022 年度 62 巻 2 号 — 掲載予定論文	
国際化支援	19
次期役員の選挙結果について	20
事務局からのお知らせ	21
グループ・ダイナミックス事典について	
グルダイ学会関係連絡先	

最初で最後ではなかったオンライン大会を振り返って

大会準備委員会

山口 洋典（立命館大学）

日本グループ・ダイナミックス学会第 68 回大会を、9 月 17 日、18 日の 2 日間にわたり、立命館大学を主催校として、オンラインにて開催いたしました。第 67 回大会に続くオンライン大会とさせていただきます。ぐるだいニュース第 60 号には、第 67 回大会後記として「最初で最後のオンライン大会を振り返って」と題した文章が大会準備委員会事務局長を担われた帝塚山大学の谷口淳一先生により寄せられています。ただし、コロナ禍の長期化により、早い段階でオンラインでの開催を基軸とした準備を進めていくことといたしました。

参加する側も、運営する側も、オンライン開催の学会に慣れてきたところもあり、それが参加人数や発表件数にどのように影響するのか気がかりでしたが、結果として 127 名の方に参加登録をいただき、特別講演 1 件、シンポジウム 2 件（大会実行委員会 1、常任理事会 1）、ワークショップ 1 件に加え、個人発表は 48 件（ロングスピーチ 4 件、ショートスピーチ 15 件、English Session 3 件、ポスター発表 26 件 [うちインタラクティブあり 8 件]）というプログラムでの実施となりました。第 67 回大会が 144 名参加・48 件発表であったことを鑑みれば、小さい規模での開催となりました。その一方で、第 67 回大会での経験を引き継ぎ、確実な運営と、より充実した交流と交歓がもたらされるよう、工夫をいたしました。

大会当日までの運営の工夫については、ぐるだいニュース第 61 号にて既に記させていただいているとおり、準備の過程でオンラインサロンを開催してきたことが挙げられます。具体的には主に関西を拠点とする理事を中心に組織化した大会準備委員会により、前回大会の終了直後となる 10 月から偶数月の第 2 火曜日の夜、当学会の機関誌「実験社会心理学研究」の読書会の形式にて対話の場を開いて参りました。各回のテーマ、使用した文献、また文献の解題にあたってお招きした話題提供者のお名前は再掲いたしません、メンバーの固定化による内輪のノリに留まらず、幅広い方々にご参加いただき、改めてグループ・ダイナミックスという専門領域の魅力を確認する機会を創出することができました。その上で、こうしたサロンの開催が、大会への参加や発表への後押しになっていることを願っているところです。

ちなみにプログラム編成にあたっては、まずは「Zoom のみで実施する」という方針を定めることとしました。第 67 回大会で導入された oVice をはじめ、国際学会では Gather.Town など、前回大会から 1 年のあいだにメタバースでのコミュニケーションもさらに広がりを見せていた中ではありましたが、Zoom のみでの実施を選択した、という具合です。その理由は、「新しい技術に触れる」ことを期待されていた方には参加や発表への意欲を削ぐ可能性も想定される一方で Zoom の使用には不慣れな方が少ないと見込まれること、対面での開催でされば「1 つのキャンパスに集う」ように、1 接続先にアクセスいただいて、一般発表でのパラレルセッションが対面の場合は隣接部屋に分かれていたように Zoom の「ブレイクアウトルーム」を利用して対応しよう、ということにいたしました。ただ、大会参加登録をしていなくても参加を会員の皆さんに場を開かなければならない総会部分は、大会とは別の Zoom ミーティングを設定して実施することとなりました。

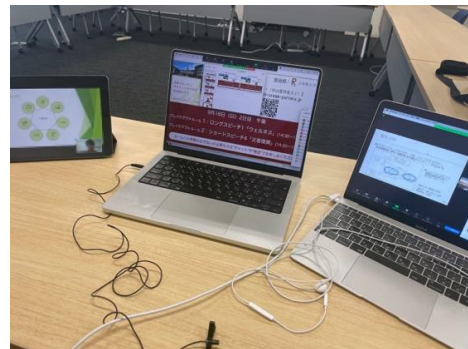


写真 1：大会運営の様子

(左：画面共有で投影した案内、右：大会本部でのオペレーションの様子 [発表画面には画像処理済])

その他の工夫としては、一般発表の各セッションでは発表と発表のあいだに 5 分のインターバルタイムを設けることにしました。言わば、対話のリレーゾーンを設けることで、一般発表の入れ替わりをスムーズに行い、かつ、次のセッションに慌ただしく移ることを避けることが狙いでした。一部で座長から「画面共有などがスムーズにできたので、やや間延びした」や「最初はこの時間をどう使ったらいいのか、戸惑った」といった声も寄せられましたが、プログラムの進行と共に参加者の皆さんからも効果的な使い方を見出していただけたようで、この取り組みは比較的好評をいただきました。また、ショートスピーチと English Session は 1 セッションあたり 3 本、ロングスピーチは 1 セッションあたり 2 本で構成し、参加者の目の疲れや集中力の維持などにも配慮したことも、プログラム編成上で工夫した点として記させていただきます。

ここで一般発表以外の内容についても触れておくことにしましょう。まずは大会準備委員会企画についてです。大会準備委員会企画では、アメリカ合衆国から作家で社会学者の Patricia Leavy 先生を招聘した大会準備委員会企画では、1 号通信でのご案内に加え、前掲のぐるだニュース第 61 号でも記したとおり、準備過程でのオンラインサロンでの対話を通じて、ミクロ⇄マクロ、実験⇄実践、生理学的⇄社会的、など、対概念として位置づけられる両極をダイナミックに往還する観点として「ソーシャル・フィクション」を取り上げることとしました。対面開催とは異なり、同時通訳のレシーバーを人数分用意する必要はなく、Zoom に標準で実装されている「言語通訳」機能により、特別講演からシンポジウムへとスムーズな流れで行うことができたことを触れるに留め、その詳細については鮫島輝美先生による報告に譲らせていただきます。

続いて、常任理事会企画では、2018 年から始まったコラボ・リクエスト企画の成果を見つめる機会となりました。コラボ・リクエストは、文字通り現場から研究者に対して協働への要望を寄せていただく取り組みで、地域連携や技術移転といった大学の社会貢献に関する幅広い議論にいち早く応えたものと捉えられます。その一方で年を重ねるごとにマッチングの成否が明確となってきたことに加え、第 68 回にはリクエストそのものが寄せられないという結果となりました。そこで、常任理事会企画として、マッチングが成立した事例と不成立となった事例に加え、コラボ・リクエストの枠組み以外で産学連携が推進された事例も紹介された上で、コラボ・リクエストの発案当時に会長を務められた西田公昭先生により「賛助会員 0」な状態を危惧して「アクション・リサーチの復活」を願って導入されたという背景をお示しいただきました。

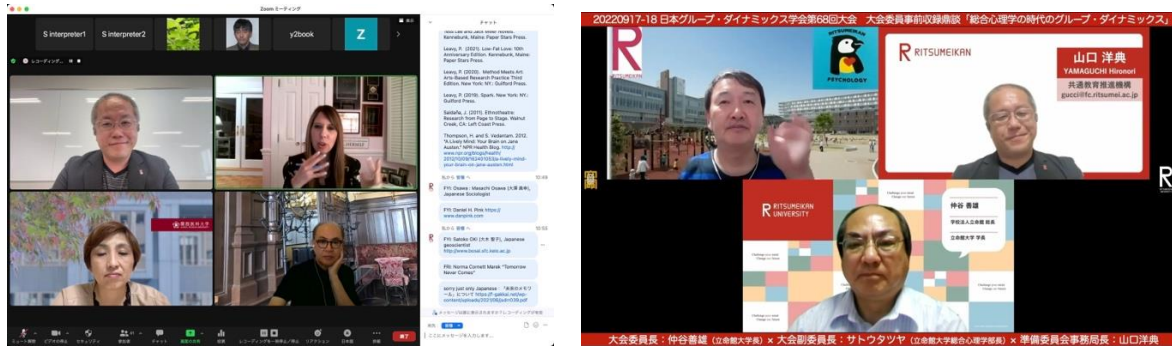


写真 2：大会内容の一場面

(左：チャットも活用した準備委員会企画シンポ、右：事前収録の実行委員長・副委員長・事務局長の鼎談)

この他、大会 1 日目には全プログラム終了後にオンライン懇親会を、大会 2 日目にはランチタイム交流会を、さらには両日とも午後のパラレルセッション中には休憩室を設置しました。オンライン懇親会には、第 67 回のような「お酒」と「特製お猪口」などの用意はいたしませんでしたが、北村英哉会長による乾杯のご発声を皮切りに、前述の常任理事会企画シンポジウムの内容をさらに掘り下げつつ、2019 年の第 66 回大会での木下富夫先生による特別講演の内容なども引き合いに出しながら、グループ・ダイナミックスの未来について語り合いました。また、ランチタイム交流会では、主催校である立命館大学として、当職が司会・進行役を担う形で大会実行委員長の仲谷善雄学長と副委員長のサトウタツヤ総合心理学部長（ともに日本グループ・ダイナミックス学会正会員）による事前収録した鼎談をご覧ください機会を設けました。この鼎談は、パラレルセッションとあわせて提供させていただいたブレイクアウトルームを用いた休憩室に入られた方にも案内させていただくことで、休憩室としてはあまり積極的にご利用はいただけなかったものの、オンライン大会ならではの趣向の一つとして受け止めていただけたように捉えています。

こうして充実した大会運営が実現したのも、全ての発表者・参加者の方々や既にお名前を挙げさせていただいた皆さまはもとより、大会担当常任理事の橋本剛先生や広報担当常任理事の藤村まこと先生をはじめ学会の役員の皆さまのおかげです。また、第 67 回大会での谷口先生ほか皆さまの奮闘があってこそこの第 68 回大会であることは言うまでもなく、転じて第 68 回大会ではクレジット決済の導入可能性の緻密な検討ができなかったこと、また一部で直前に座長の交代が発生したことなど、反省する点もいくつかございます。次回、第 69 回大会は久々の対面での開催を目標として、高知工科大学の三船恒裕先生のもとで準備が進められて参りますので、今度こそ「コロナ禍での最後のオンライン大会」となったのではないかと見込まれます。何にも増して、滞りのない準備が進められたのは準備委員を担っていただいた方々、そして 2022 年 1 月 28 日の大会運営にかかる最初のミーティングを皮切りに参加登録システム（ORSAM）及び Web 抄録集（ORSAM Portal）を運用いただいた中西印刷の澤田さま、小畑さま、東海さまの貢献があったことであることを記し、謝意を表させていただきます。

大会準備委員会企画シンポジウム
「実験・実践のリアリティと社会のアクチュアリティ
－再現可能な一般性の発見と個別性からの普遍性の追求のあいだで－

鮫島 輝美（関西医科大学）

今回、大会準備委員会では、パトリシア・レヴィー氏の特別講演「物語の創作力と研究法の刷新 ソーシャルフィクションの方法」を青写真として、「実験・実践のリアリティと社会のアクチュアリティ」と題したシンポジウムを企画しました。その理由としては、現在のグループ・ダイナミックス学会の現状を踏まえ、これまで多くの研究者を育ててくれた場として、今後もより魅力的な学会として継続していくために、実験研究や実践研究のあり方について対話的に考える機会としたいと考えたからです。このような考えに至ったきっかけは、2021 年 60 巻 2 号に掲載された矢守克也氏の論文「〈実験社会心理学研究〉に関する研究」でした。私自身は、もともと実践科学である看護学を専攻してきたため、実践研究を長年おこなってきました。そのため、実験研究にほとんど携わることなく、「実験」について深く考察することがなかったため、非常に刺激を受けました。この論文では、「実験の概念をより広義なものへと拡張し、実験という手法が本来有する豊かなポテンシャルをより大きく引き出す方向で、実験社会心理学の領域を再構築すること」を目指しており、こうした議論をもっと対話的に行ってみたいと考えました。

このシンポジウムを企画するにあたって、大会準備委員会が中心となり、2021 年 10 月から 2 ヶ月ごとにオンラインサロンを開催し、過去の「実験社会心理学研究」の論文を読み直す機会を設けてきました（詳細は「ぐるだいニュース第 61 号」参照）。前述した矢守（2021）を第 1 回で読み、第 2 回では、森（2010）、ガーゲン（2009 鮫島・東村訳 2020）、第 3 回では、矢守・杉万（1992）、北村（2002）、宮本・渥美・矢守（2012）、第 4 回では、坂田（1996）、第 5 回では、三隅（1971）、サトウ（2003）、第 6 回では、野波（2022）の論文を取り上げました。普段、自分だけでは積極的に読むことがない論文に触れ、著者本人にも登壇してもらい、読むだけではわからなかった研究に至った背景や問題意識まで知ることができました。そのため、これまでの実践研究だけでなく、実験研究についても、深く再考する機会となったのでした。

このような準備を持って臨んだレヴィー氏の講演の中で、特に心に響いたのは「現在の研究のあり方はこのままでいいのか？」という問題意識でした。彼女は、これまで伝統的なスタイルの論文を多く執筆する中で、1 つの論文で伝えられることは僅かであり、長年にわたって蓄積してきた知識や洞察、また教育の中で得た経験を発表する場がないと感じていました。また、伝統的なスタイルの論文の読者は非常に限られており、これらの知見を社会に還元できていない、という思いに至りました。そこから、「Art Based Research (ABR)」と出会い、既存の論文では表現が難しかった感情に基づいた社会的仕組み、愛情や喪失、グリーフなど、人々の生活の要素を表現できる方法として見出しました。そして、Art の一つである小説やフィクションを用いて研究成果を伝達する方法として「ソーシャルフィクション」の発想を得たのでした。

ソーシャルフィクションという研究方法を活用することで、多くのストーリーが伝達可能になり、研究者だけでなく一般の人々にもアプローチできたことを、大きな成果として示してしてくれま

した。そして、フィクションだからこそ、多くの人の共感を呼び、ポジティブな影響を与え、世界をより良いものに変化させることに貢献できるのではないかと問いかけてくれました。レヴィー氏の講演は、私たちをこうした新しい研究方法へと誘うものでした。

それを受けて、鮫島は、即興演劇を活用している教育実践を紹介しました。コロナ禍にあっても医療者は非常に厳しい状況に置かれ、社会から求められる理想像は高く、専門職養成課程においても高い専門性の習得が求められています。しかし、実習のように「リアルであればあるほどよく学べる」わけではなく、返って緊張感を助長することもあります。演劇を授業に取り入れることで、リアルからフィクションに至るレンジを調整し、安心して学べる環境を確保することができました。また、矢守は、見田宗介氏（2008）の「まなざしの地獄」を例示し、一般性、共通性といわれる次元と、特異性、個別性といわれる次元をどのように幸せな形でカップリングするか、また、そのための手法として、ソーシャルフィクション、実験室実験やフィールド研究をどのように活用できるのかを、これまでの防災研究の成果を用いて提示しました。

3つの発表の共通点として、1）研究において様々な方法を実験的に使用することで、様々な異なる観点から物事を見られるようになる、2）研究するものを対象化するのではなく、同じ時代を生きる者として、新しいストーリーフォーマットで現場の人に語ってもらうことで、過去や未来をつなぐストーリーテリングの力強さを再認識する、ことが挙げられました。その上で、リアルとフィクション、実験とフィールドというように対立的に考えるのではなく、また、個別的な体験を超えて、社会的な日常生活をえがき出し、より良い世界を醸成していくために、グループ・ダイナミックスはもっと誠実に、かつ大胆に、そして丁寧に研究に取り組んでいく必要があるのではないか、という気づきが与えられました。

今回、このシンポジウムに参加させてもらうことで、自らの実践の中にある「実験的なもの」や、実験の中にある「実践的なもの」が交差するような視点を得ることができました。同時に、研究者、大学の教員という日々の実践の中で得られる多くの気づきを、伝統的な論文の形に集約させる困難さも改めて感じることができました。医療に代表されるように、科学的根拠が「必然」のように叫ばれる背景には「実験的要素」を排除しきれないからではないのでしょうか。例えば、一人の患者が新しい薬を服用する場合、その薬自体はいくつもの実験過程を経て「安全性」が確保され、「適量」という妥当性が確保されているもの、として扱われていますが、その患者にとっての「安全な量」やアレルギーの有無、といった点は、服用してみないとわからない、という意味で「実験的」だからです。

これからも、グループ・ダイナミックスをより魅力的な学問として伝承していくために、得られた知見を社会に還元していくためにも、今後も日々の研究や教育に真摯に取り組みたいと思わされる機会となり、改めてこのような機会を与えていただいたことに感謝いたします。最後に、第68回大会だけでなくオンラインサロンにおいても、企画、準備、運営と全てにおいて、影になり日向になり、支えてくださった立命館大学の山口洋典先生に感謝の意を表します。本当にありがとうございました。

シンポジウム参加を振り返って

正木郁太郎（東京女子大学）

第 68 回大会では、コラボ・リクエスト企画のシンポジウムに登壇させていただきました。発表者としての役割もさることながら、一人のオーディエンスとしても非常に刺激的な場でした。榊様と永合様のお話からは、現場の問題に即しているからこそその「熱」のようなものを強く感じました。必ずしも私自身の専門とびったりはまるわけではないものの、それでも納得感を持って話を伺えたのは、やはり生の「問題」に日々



接しているからこそその問題意識がこもっているからこそと思いました。そして西田先生のお話からは、コラボ・リクエスト企画にかける想いや、その背後にあるご経験、危機意識などを伺うことができました。私自身にとっても、改めてこうした企画や「社会とかかわること」の大事さを考え直す機会になりました。また、一つひとつのお話の内容もうなずくことばかりで、翌日からも走り続ける希望と意欲もいただけたように感じます。

私の発表は、様々な企業等と連携した研究経験に関する内容でした。「詳しい自己紹介」のようになってしまいましたが、このように自分の経験について話しする機会はほとんどなく、経験を振り返る非常に良い機会になりました。私自身、これまでは「学会や学術の未来」のようなことを意識して連携研究に取り組んできたわけでは必ずしもありませんでした。むしろ「たまたまの出会い」に左右された個人的活動も多く、また「楽しいから」「誰かの役に立てて、求められているから」といった単純なモチベーションで研究を続け、現在に至ります。その意味で、どこまで皆様のお役に立てるお話ができたのかはとても不安ですが、ご参加された方々にとって何か一つでもご参考になるものがあれば幸いです。

発表でもお話しした内容ですが、私はグループ・ダイナミックスや社会心理学の研究には、非常に根強い現実的なニーズがあると感じます。ただ、同時に「あまり現場の方々に研究を知っていただけていない」とも強く感じており、現場の方々にとっても、また研究者にとっても、大きな損をしているように思います。その意味でも、コラボ・リクエスト企画に加えて、学会外部と積極的に関わるような仕組みづくりや、そういった協働を受け容れる・評価する場づくり、あるいは単純に「自分の研究について色々な人と話す」といった場が求められているのかもしれない。

最後になりましたが、この度はこのような貴重な機会をいただいて、まことにありがとうございました。大会およびシンポジウムを企画・運営いただいた皆様や、発表のお声がけをいただいた五十嵐先生に、この場を借りて御礼申し上げます。

コラボ・リクエストのこれまでとこれから

常任理事（渉外担当）

五十嵐 祐（名古屋大学）

第 68 回大会では、過去の大会のコラボ・リクエスト企画に参加いただいたクライアントの方々をお招きし、常任理事会企画シンポジウム「コラボ・リクエストのこれまでとこれから」を開催しました。榊敏郎様（合同会社 SAT 研究所）には、本企画を通じて発展した共同研究についてお話しいただき、また永合由美子様（BMDesign 研究所）には、あえてマッチング不成立の事例についてご紹介いただきました。いずれも企業や組織側のニーズをアカデミアにカジュアルに伝える場の必要性、さらには異なる風土や文化を超えた相互理解を進めることの重要性が強く感じられる発表でした。正木郁太郎先生（東京女子大学）には、ご自身の経験をもとに、さまざまなコラボの事例に通底するもろもろの問題と、アカデミアと現場との連携を実現するうえで重要なマインドを、大変わかりやすい形で共有いただきました。指定討論者であり、本企画の発案者である西田公昭先生（立正大学）には、企画そのものの位置づけを超えて、今後の学会運営の方向性、さらにはグループ・ダイナミックスの研究者としての役割や責任を改めてリマインドいただきました。来年度以降も、従来のマッチング形式の企画を含め、さまざまな形で本企画を発展させていければと考えています。会員の皆様におかれましても、ぜひご協力のほどお願い申し上げます。

優秀論文賞

機関誌編集委員長 常任理事

坂田桐子（広島大学）

今年の優秀論文賞の選考対象論文は、実験社会心理学研究第 61 巻 1 号及び 2 号に掲載された展望論文 1 編、資料論文 3 編、Short Note 3 編の計 7 編でした。この中から優秀と考えられる論文 3 編を選び、1 位から 3 位まで順位をつけて、8月31日を締め切りとして編集委員に投票をお願いしました。論文の著者となっている編集委員を除き、21 名の編集委員から投票が届けました。規程に従って、1 位票に 3 点、2 位票に 2 点、3 位票に 1 点を与えて集計しました。その結果を参考資料として、9月16日に優秀論文賞選考委員会を開催して協議した結果、今年は下記 2 編の論文に優秀論文賞を授与することに決定いたしました。

谷辺哲史先生・唐沢かおり先生

自動運転による事故とメーカー、ユーザーに対する責任帰属

（第 61 巻第 1 号，pp. 10-21）

頼政良太先生・宮本匠先生

日本における災害ボランティアセンターのこれまでとこれから

—「公」と「民」の対立を乗り越えた先に—

（第 61 巻第 2 号，pp. 37-56）

受賞された先生方、おめでとうございます。今後のご研究の益々のご発展をお祈り申し上げます。

優秀論文賞

谷辺哲史・唐沢かおり (2021).

自動運転による事故とメーカー、ユーザーに対する責任帰属.
実験社会心理学研究, 61 (1), 10-21.

谷辺哲史 (埼玉県立大学)

このたびは優秀論文賞という荣誉ある賞に選出していた
だき、大変光栄に存じます。選考委員の先生方に心より御
礼申し上げます。

本研究は、自動運転によって事故が起きたときの責任帰
属を調査したものです。原因帰属と責任帰属の関係、問題
責任（出来事を引き起こしたことの責任）と解決責任（起
きたことに対処する義務）の区別といった社会心理学でこ
れまでに論じられてきた概念を用いて、将来の社会で起こ
りうる問題に対する一般市民の態度を検討しました。調査
の結果、交通事故の原因を人工知能に帰属するほどメーカ
ーやユーザーへの原因帰属も高くなることや、責任の2つ

の側面で判断のされ方が異なり、問題責任の帰属はそれぞれの主体（メーカー、ユーザー）への
原因帰属と対応する形で判断される一方で、メーカーの解決責任は人工知能への原因帰属とも関
連することが示されました。架空の出来事に対する態度を検討しているにすぎないという限界は
もちろんありますが、法整備を含めた社会的な対応が求められる問題について、現実の技術の普
及に先駆けて取り組んだ点を評価していただけたのではないかと想像しています。今回の受賞を
励みとして、これからも社会心理学の学術的知見と現実社会の課題を結びつけられる研究を行っ
ていきたいと思っています。

本論文はグルダイ学会の皆様のお力添えによって執筆できました。調査結果の一部は 2019 年
度の第 66 回大会で発表したもので、その場で頂いたご指摘は、研究の内容をわかりやすく記述す
るために大きな助けになりました。また論文の査読の過程では、研究の意義と限界を明確に整理
できるように重要な示唆を頂き、論文の完成度を格段に高めることができました。査読は論文を
審査されるだけでなく、批判を通じて論文をよりよいものにしていく作業であることを実感しま
した。学会で議論してくださった皆様、査読してくださった先生に感謝いたします。今後も先生
方からご指導を賜れますと幸いです。このたびは本当にありがとうございました。



優秀論文賞

頼政良太・宮本匠（2021）.

日本における災害ボランティアセンターのこれまでとこれから—
『公』と『民』の対立を乗り越えた先に、
実験社会心理学研究, 61 (2), 37-56.

頼政良太（兵庫県立大学）

この度は、名誉ある賞に選出いただき、大変光栄です。優秀論文選考委員の先生方に心から感謝申し上げます。私は、災害時に被災者を支援する団体の職員として働きながら研究を進めてまいりました。現場の改善に携わる支援者が自ら研究することで、実践の場がより豊かになっていくような変化を起こすことや、研究の面でも実践との協働によって理論が進化していくことを目標にしながら、これまで論文を執筆してきました。本論文が優秀論文という評価をいただけたということは、実践だけでなく研究面でも少しは貢献ができたのではないかと感じ、とても嬉しく思います。



本論文は、阪神・淡路大震災以降に社会に定着した災害ボランティアセンターに着目し、その変遷をまとめたものです。ちょうど、新型コロナウイルスによる感染症が流行しはじめたことで、なかなか現場に行けなくなってしまった時期に、これまで発行された報告書などを読んでまとめてみようと思い書き始めたものです。これまでの先行研究では個別のボランティアセンターに注目したものが多く、これまでの災害ボランティアセンターの歴史についてまとまって記述した論文は多くありません。そこで本論文では、災害ボランティアセンターの歴史の変遷をまとめた上で、現在抱えている課題を明らかにしようと考えました。

阪神・淡路大震災では、多くのボランティアが被災地に駆けつけて活動し、社会に大きなインパクトを与えました。しかし、災害ボランティアを受け入れるための仕組みが整っていなかったのも事実です。駆けつけたボランティアが多くて混乱したという言説も見られました。そのため、ボランティア活動をより効率よくおこなうために災害ボランティアセンターという仕組みが構想され、さまざまな災害の度により良い仕組みへの試行錯誤が続いてきました。災害ボランティアが被災地の復興には欠かせない存在となったからこそ、その実践のための仕組みが整えられてきたのです。しかし、現実には災害ボランティアセンターという仕組みが整ったゆえに、支援の対象から外れてしまった方に手が差し伸べられないという課題や、画一的な支援しかできないという課題も見られるようになりました。

その後、災害ボランティアセンターは多様な主体によって担われる場面も増えてきました。これまでは社会福祉協議会が主要な担い手となっていました。自治会や商工会、農協なども担い手となっているケースも見られ、個性的なボランティアセンターが発足するようになってきました。しかし、既存の災害ボランティアセンターとの対立が生まれたり、資金面や人材面での脆弱性があるために長期的な支援につながらなかったりするなど、課題も多く残っています。

近年は災害が多発しており、ますますボランティアへの期待は高まっています。これまでの災害ボランティアセンターの課題を見つめ直し、改めてボランティアの可能性を高めていくための議論のきっかけとなるような論文となれば幸いです。

2022 年度優秀学会発表賞 選考結果のご報告

2022 年度優秀学会発表賞選考委員長

橋本 剛（静岡大学）

2022 年 9 月 17 日～18 日に立命館大学主催でオンライン開催された日本グループ・ダイナミックス学会第 68 回大会において、「2022 年度優秀学会発表賞」の選考が行われました。

審査過程は、優秀学会発表賞選考規程に沿って、以下の手順で進められました。

はじめに、論文集原稿を対象とした事前審査では、部門ごとに理事全員による投票が行われ、各部門上位 3 位までがノミネート発表として選出されました（ただしショート部門は同順位につき 4 発表を選出）。

当日の二次審査では、理事 3 名の審査者がそれぞれのノミネート発表に参加して、内容とプレゼンテーションを各 5 点で採点しました。

最終的に、一次審査の投票数（1 票を 1 点とカウント）と二次審査の採点を加算する方法で、各部門で総合得点が最も高い発表を受賞候補者として、その候補者案について選考委員（理事）の承認を得て、最終的に受賞者を決定いたしました。

その結果、今年度の同賞は、以下の発表における第一発表者の方々に授与されることとなりました（敬称略）。なお、English Session では 2 名が同点で最高得点でしたので、両名受賞といたしました。

<ロング・スピーチ部門>

- ・第一発表者：清水 佑輔（東京大学）
- ・発表題目：エイジズムが高齢者に及ぼす影響：
若者への態度と高齢者の精神的健康に着目して
- ・共同発表者：鈴木 雅、畠 由佳子、榎 敏朗

<ショート・スピーチ部門>

- ・第一発表者：前田 楓（立教大学）
- ・発表題目：インクルーシブ教育に対する認識についての日米英豪比較
- ・共同発表者：橋本 博文、佐藤 剛介

<English Session 部門>

- ・第一発表者：Yuta Kido (Hokkaido University)
- ・発表題目：Coevolution of norm-psychology and cooperation under exapted conformity
- ・共同発表者：Masanori Takezawa

< English Session 部門 >

- ・ 第一発表者：Yui Kato (University of Tokyo)
- ・ 発表題目：How fear of negative evaluation and causal attribution affect paternity leave in Japan
- ・ 共同発表者：Yukiko Muramoto

< ポスター発表部門 >

- ・ 第一発表者：井奥 智大（大阪大学）
- ・ 発表題目：関係価値は集団的所有権脅威の悪影響を抑制するのか：日韓関係を題材に
- ・ 共同発表者：綿村 英一郎

受賞者の皆様、おめでとうございます。受賞者は、受賞した内容に関する論文を第一著者として『実験社会心理学研究』に優先的に投稿する権利を有し、「特集論文」に準じて主査および副査1名で審査を受けることができます。ただし、投稿の権利は受賞発表日（2022年9月29日）から1年間に限って有効です。

今年度も昨年度に引き続き、オンライン開催ということで、エントリー、発表資料の用意、当日のプレゼンテーションに至るまで、難しい部分も多々あったのではないかとおもわれますが、みなさまのご協力とご尽力のおかげで、無事に例年通りの形で実施することができました。本賞にエントリーして下さった発表者の皆様、審査にご協力下さった理事の皆様、そしてオンライン発表での実施を可能として下さった大会準備委員会の皆様に、心より御礼申し上げます。ありがとうございました。

清水佑輔・鈴木雅・畠由佳子・榎敏朗

エイジズムが高齢者に及ぼす影響：若者への態度と高齢者の精神的健康に着目して

清水 佑輔（東京大学、日本学術振興会）

この度は名誉ある賞に選出いただき、大変光栄に存じます。選考委員の先生方、並びに大会当日に貴重なコメントをくださった皆様に心から感謝申し上げます。本研究は、超高齢社会の日本における大きな課題である「世代間対立」の軽減を目指す取り組みとして実施致しました。世代間対立を強化する要因は勿論沢山あるのですが、社会心理学の研究者として扱うべき要因の1つはエイジズムであると考えています。実際、高齢者以外の世代の参加者を対象として、エイジズムの諸相や関連要因について扱った先行研究が数多く蓄積されています（ただ、日本は世界有数の長寿国である割には、エイジズム研究が不十分だと感じています）。



一方、エイジズムが高齢者に対して実際にどのような影響を及ぼすのか、そしてそれが世代間対立にどう結びつくのかに関する研究は乏しいです。よって本研究では、高齢者を対象とした調査を実施し、高齢者が他世代から向けられるエイジズムを感じる程度と、(1) 生活満足度、(2) 抑うつ傾向、(3) 若者への態度の関連について検討しました。結果、エイジズムを強く感じている高齢者ほど、生活満足度が低く、抑うつ傾向が高く、若者への態度が否定的でした。エイジズムによって高齢者の精神的健康状態が悪化するだけでなく、若者への態度が否定化するという可能性が示唆された本研究は、世代間対立の原因について考察するうえで有意義だと考えています。

ところで、本研究は日本グループ・ダイナミックス学会第67回大会の「コラボリクエスト企画」をきっかけとした共同研究の成果です。当時修士課程2年だった自分は「高齢者の well-being 向上」を目指す SAT 研究所のオンラインブースにおそろおそろ入室してみました。右も左も分からぬまま飛び込んだ自分を快く受け入れてくださったことに大変感謝しています。それ以降定期的に研究討議を重ね、本原稿執筆時（2022年11月）までに計3件の調査を実施致しました。院生や学部生にとって、自分の研究室以外の場での共同研究に携わることは非常に有意義かつ刺激的な経験です。学会大会の場で貴重な出会いの機会を頂いたことに心より感謝申し上げますと共に、このような企画が今後も開催されることを願うばかりです。

最後になりましたが、研究室外での共同研究活動を快く容認・応援してくださっている指導教官の唐沢かおり教授にも、この場を借りて感謝申し上げます。外部で学んだ成果を博士論文の執筆やゼミで活かすことができるよう今後も努力して参りますので、引き続きご指導を賜りますようお願い致します。

前田楓・橋本博文・佐藤剛介

インクルーシブ教育に対する認識についての日米英豪比較

前田 楓（立教大学）

この度は名誉ある賞を頂戴し、大変光栄に存じます。審査をしてくださった先生方、発表の際に貴重なご意見をくださった先生方に、心より感謝申し上げます。

私は博士後期課程の3年間、様々な調査や実験を通じてインクルーシブ教育に対する人々の態度に関する研究をしてきました。本発表もその成果の一つです。私がインクルーシブ教育を研究テーマとして取り上げたのは、インクルーシブ教育の理念と教育現場の現状との間に乖離があると考えたことがきっかけです。実際に、私たちが行ってきた調査研究によれば、大学生や一般成人、現職の教員、そして障害当事者も、インクルーシブ教育を望ましい教育と評価しつつも、その実現可能性を低く見積もっていることが示唆されています。本発表では、こうしたインクルーシブ教育に対する消極的ともいえる態度を「集団主義的」と形容される社会のあり方と結びつけて分析しています。その結果わかったことは、アメリカ・イギリス・オーストラリアの3か国の人々との比較において、日本人はやはりインクルーシブ教育に対して消極的である（インクルーシブ教育に対する賛成度は3か国と比べて低く、またその実現可能性に関する認識も低い水準にある）ということです。さらに日本人のみを対象とする追加の調査においても、これまでと同様にインクルーシブ教育に対する消極的な態度が示され、そしてそうした消極性は、他者一般への信頼の低さや、自分とは異なる他者への寛容性の低さに関連していました。これらの結果は、一般的信頼や寛容性の低さをもたらす社会のしくみこそが、日本人のインクルーシブ教育に対する消極的な態度を形成する可能性を示すものです。

日本人のインクルーシブ教育への消極性を個々人の心の問題として捉えることは簡単のように思えますが、そのような理解をしてしまうと、個人の心のあり方を変えようとするばかりに終始してしまいます。そうではなく、個々人を取り巻く社会のしくみを変えていく努力も必要ではないかと私は考えています。もちろん環境や制度を変えることはたやすいことではありませんが、問題を個人に帰属してしまうのではなく、環境を変えることの重要性を調査データに基づいて提示することには一定の意味があると考えています。これからも、こうした視点でインクルーシブ教育をはじめとする学校教育現場が抱える課題について調査や実験データをもとに考えていければと思っています。今後とも、ご指導ご鞭撻のほど、何卒宜しくお願いいたします。この度は、本当にありがとうございました。



Yuta Kido・Masanori Takezawa

Coevolution of norm-psychology and cooperation under exapted conformity

貴堂 雄太（北海道大学）

この度は名誉ある賞をいただき、大変うれしく思います。選考委員の先生方、発表の際に貴重なご意見をくださいました先生方、そしてセッションに足を運び発表をお聞きいただいた皆さんに厚く御礼申し上げます。

今大会の発表では、English Session にて、個々の集団が持つ社会規範と規範から学習する心の機構の進化により協力行動が進化する可能性を検討した理論研究を報告させていただきました。協力進化の謎を解明しようとする従来の研究の多くは、「必ず協力するエージェント」や「互恵的な戦略をとるエージェント」といった遺伝子決定論に依拠する簡易的なエージェント・モデルを想定してきました。それに対し、本研究は協力や罰規範、そして多数派の行動といった規範を学習し遵守するエージェントを想定した点で前提を異にします。つまり、こうした人間の学習能力というマイクロレベルのメカニズムが引き起こすグループ・ダイナミクスから、協力の進化というマクロレベルの現象の理解を試みた点に独創性があると考えております。検討方法としては、エージェント・ベース・シミュレーションを用いた理論的な方法論であり、グループ・ダイナミクス学会においては「規範から逸脱した」研究内容であることは承知しておりましたが、上記の理由を鑑み、本大会での発表に至りました。少しでも新鮮に感じ、興味深く聞いていただけた方がいらっしゃったのなら、喜ばしい限りです。複雑なダイナミクスを包含する人間社会を解き明かそうとする試みの中で、実証研究と理論研究が手を携え、補完し合いながら臨むことを一研究者として願っております。

初めて本学会に参加させていただきましたが、大変興味深い発表が多く、感銘を受けると同時に刺激を受けました。その中でも、拙い発表ではございましたが、賞を賜ったことは大変光栄です。一方で、今後も研究活動に真摯に取り組まねばと、一層身の引き締まる念に堪えません。本章を励みにし、当分は試される大地にて、研究活動に勤しみたいと思います。最後になりますが、この研究は多くの方のご助力なしには実現できませんでした。様々なアドバイスをくれた研究室の先輩はじめ友人たち、そして常日頃ご指導くださる竹澤先生に改めて感謝申し上げたいと思います。この度は、本当にありがとうございました。



Yui Kato・Yukiko Muramoto

How fear of negative evaluation and causal attribution affect paternity leave in Japan

加藤由衣(東京大学)

この度は、名誉ある賞をいただき、大変光栄に存じます。選考委員の先生方、並びに発表の際に貴重なコメントをくださったみなさまに心から感謝申し上げます。

この研究は、日本社会で男性の育休がなぜ広がらないのか、取得を希望する人がなぜ実際には取得が難しいのかという疑問が発端でした。発表では、男性の育休取得に関して多元的無知—集団内の規範を個人は受け入れていないにも関わらず、他の成員は受け入れていると信じている状態—が現在でも起こっているのか、また原因帰属の視点から、育休を取得した理由が個人ではなく外的要因に帰属されることで、他成員からの否定的評価懸念が下がるのかどうか

検討した結果を報告しました。多元的無知に関しては、男性の育休一般に対して多元的無知が起こっているという先行研究を再現できただけでなく、取得期間に関しても多元的無知が生じている（他者は自己よりも長期間の取得に否定的）と示すことができました。一方、外的要因の効果については多くの検討の余地があり、限界点が残る中での発表となりました。場面想定法の限界を感じた部分でもありました。同時に、仮説とは一部異なる結果でしたが、外的要因があるからといって即ち評価懸念が下がる・育休取得意図が上がるというわけではないという結果が出たことは一つの大きな収穫でした。どのような条件がそろえば、外的要因への帰属によって否定的評価懸念が下がり取得につながるのか、研究を行う必要があると感じています（もちろん原因帰属以外の要因も）。

まだまだ道半ばの研究ではありますが、同世代が（父）親になる人が少しずつ増えている中、男性の育休取得をテーマに研究を行い、本賞をいただけたことは素直に嬉しく思っております。学ぶことができる環境に恵まれたことに感謝し、微力ではありますが周りや社会に還元ができるよう、いただいたコメント・本賞を励みに今後も取り組んでいきたいと思っております。

最後に、本研究の実施にあたっては、村本由紀子先生をはじめとする多くの方にアドバイス・ご協力いただきました。私事ですが、ICUの学部を卒業し、大学院に入学したばかりの私は研究室の先輩・先生方の研究や分析方法に圧倒されるばかりでした。こんなにも大学院生がいて、日々研究をされていることの驚きは今でも鮮明に覚えています。そんな中、優しく時に厳しく指導してくださった先生、分析や発表に何度も助言をくださった研究室の先輩・後輩がいなければこの文章を書くことはありませんでした。改めて感謝を申し上げます。この度は誠にありがとうございました。



井奥智大・綿村英一郎

関係価値は集団的所有権脅威の悪影響を抑制するのか：日韓関係を題材に

井奥智大（大阪大学）

この度は、名誉ある学会発表賞を賜り、ありがとうございます。選考いただきました先生方、発表の際にご質問、ご意見いただきました先生方に心より感謝申し上げます。

米国と比べ、東アジアのパートナーである韓国に対して否定的な反応を日本人はとる傾向にあります。外交に関する世論調査の結果を見ても、年度によって多少の違いはあるものの、過去10年間一貫してこのパターンが認められます。

韓国に対する日本人の否定的な反応の背後には、どのような心理が働いているのでしょうか？人は何かを所有していても、失う不安や脅威を感じることがあります。集団間の文脈において、このような心理は集団的所有権脅威と呼ばれます。例えば、韓国が日本領土の所有権を奪おうとすれば、人は脅威を感じると考えられます。

もしそうなら、韓国による脅威の悪影響を抑制するものは何でしょうか？韓国との関係価値を高く見積もっていれば、その悪影響を抑制できるかもしれません。仲直りの研究において、相手との関係価値を高く見積もっていると、霊長類は相手を赦しやすいたことがわかっているからです。ただし、関係価値を高く見積もっていることが逆効果になるとも考えられます。韓国との関係価値を高く見積もっているからこそ、脅威に晒されると、人は韓国に裏切られたと感じるからです。

本研究では上記2つの問いを探究することを目的に、竹島の領有権を題材として架空のシナリオを読んでもらい、韓国に対してどのように思うかを問うという方法で研究を行いました。研究の結果、韓国が日本領土の所有権を奪おうとすれば、人は脅威を感じ、韓国への支援に抵抗感を示しました。また、韓国との関係価値を高く見積もっている場合、韓国による脅威から人は韓国への支援により強い抵抗感を示しました。

これらの結果から、韓国に対する日本人の否定的な反応の背後には集団的所有権脅威が関わっており、また少なくとも短期的には関係価値はその脅威の悪影響を強める可能性があると言えます。竹島周辺での韓国側による一方的な行為が報道され、これは韓国に対する支援に抵抗を生むだけでなく、日本国内の韓国人に対する偏見にもつながるかもしれません。韓国との関係価値をわかっているれば、それら反応を抑制できると考えられます。しかし、関係価値が短期的には逆説的な効果をもたらすことも認識しておくことは重要ではないでしょうか。



編集委員長 坂田桐子 (広島大学)
副編集委員長 中島健一郎 (広島大学)

前号のグルダイニュースで特集企画について「早く会員みなさまにお届けしたい気持ちが強くなっております」とお伝えしました。下記の通り、その一部が早期公開されております。その他の論文についても編集作業が進んでおり、そう遠くない時期にみなさまに紹介できる運びです。お待ちいただいている方々には申し訳ありませんが、もう少しお時間を頂戴できれば幸いです。

この特集企画を含めて、編集委員会では「論文を評価するのは読者であり、その機会を作るのが仕事」という精神のもとで作業を進めております。これが可能なのは、ひとえに論文を投稿してくださっている会員みなさまと、審査に協力してくださっている査読者のみなさまのおかげです。心よりお礼申し上げます。今後も読者のみなさまの幅広いニーズに応えることを目指し、多くの論文をお届けできるよう努めていきます。引き続き、実験社会心理学研究をよろしく願います。

実験社会心理学研究 2022 年度 62 巻 2 号 — 掲載予定論文

(2023 年 3 月発行予定)

原著論文

- 杉山高志・矢守克也 (早期公開済)
「Days-After」の視座を用いた防災活動の分析
- Keita Suzuki, Yukiko Muramoto (早期公開済)
“You will never know unless you try hard”:
Entity theorists who perceive effort as information
- 村上幸史
返事は早い方が良いのか? —携帯メールや LINE における「互酬性仮説」の検証
- 宮前良平・大門大朗・渥美公秀
新型コロナウイルス感染症社会における災害ボランティア排斥言説の検討

特集『新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) とグループ・ダイナミックス』

原著論文

- 矢守克也・松原悠 (早期公開済)
「自粛」のグループ・ダイナミックス
- 田戸岡好香・石井国雄・樋口収 (早期公開済)
新型コロナワクチンの接種が在留外国人に対する態度に及ぼす影響
— 行動免疫システムの観点から —

- 清成透子・井上裕香子・松本良恵（早期公開済）
COVID-19 の身近な感染脅威が予防行動に与える影響
— 日本人大学生を対象とした研究 —
- 吉澤寛之・松下光次郎・笹竹佑太・酒井 翔・吉田琢哉・浅野良輔
対人環境が子どもの反社会的傾向の変化に及ぼす影響
— COVID-19 対策としての長期自宅待機前後の縦断的検討 —
- 真島理恵・木村多聞
利他的罰と感染予防規範逸脱者・感染者に対する攻撃との関連の検討
- 縄田健悟・大賀哲・藤村まこと
COVID-19 に関する陰謀信念がもたらす感染防止政策の否定と感染リスク行動
— 感染リスク軽視の媒介的影響 —

Short Note

- Mei Yamagata, Asako Miura（早期公開済）
Retrospective bias during the COVID-19 pandemic

国際化支援

常任理事（渉外担当）

五十嵐 祐(名古屋大学)

国際学会発表支援制度について

2022 年度は、国際学会発表支援制度に関する規程の改正を受けて、対面及びオンラインで開催される学会の参加費補助についても支援の対象としました。しかしながら、期日までの応募はありませんでした。本制度では、締め切りの時点で発表予定の研究だけではなく、すでに当該年度に学会発表を行った研究についても支援対象となります。また、他学会の支援制度との重複受給も可能です。詳細は以下のページをご参照ください。来年度に向けて、ぜひ皆様からのご応募をお待ちしています。

関連ページ：<http://www.groupdynamics.gr.jp/support.html>

研究の国際化支援制度(英文校閲補助)について

この制度は、本学会会員の研究の国際化を支援するため、会員が自らの研究成果を英文誌に投稿する際の英文校閲代金の一部を補助するものです。昨年度は 3 名の会員に補助を行いました。今年度も 3 月末まで引き続き募集を行っています。応募者の年齢制限はなく、複数論文の校閲費を合算して申請できます。また、過去に補助を受けた会員の方々も、当該年度以降に改めて申請することが可能です。詳細は以下のページをご参照ください。ぜひ皆様からのご応募をお待ちしています。

関連ページ：http://www.groupdynamics.gr.jp/support_international.html

次期役員の選挙結果について

選挙管理委員会 事務局長 橋本 剛（静岡大学）

次期役員選挙が完了しました。選挙管理委員のみなさま、ご投票頂いたみなさま、どうもありがとうございました。次期役員のみなさま、どうぞよろしくお願いいたします。

開票作業日時： 12月18日（日）（11:00より開封作業、途中休憩をはさんで16:00まで）
作業場所： 愛知淑徳大学星ヶ丘キャンパス1号館 13A教室

（以下、複数連記はいずれもアルファベット順）

会長

坂田桐子

常任理事

藤村まこと 橋本 剛 石井敬子 村上史朗 中島健一郎 相馬敏彦

地区別理事

北海道・東北：辻本昌弘（次点 福野光輝 次々点 森直久）
関東：埴田健司 新谷 優
（次点 大坪庸介 次々点 村本由紀子）
中部：石井敬子（次点 吉澤寛之 次々点 小川一美）
近畿：渥美公秀 矢守克也
（次点 橋本博文 次々点 東村（橋本）知子）
中国・四国・九州・沖縄：加藤謙介 中島健一郎
（次点 縄田健吾 次々点 樂木章子）

全国区理事

藤村まこと 橋本 剛 日比野愛子 宮前良平 宮本 匠
村上史朗 永田素彦 相馬敏彦 八ッ塚一郎
（次点 北村英哉 次々点 三浦麻子）

監査

唐沢かおり 山口裕幸（次点 西村太志 次々点 浦光博）

会長指名理事

橋本博文 三浦麻子 村本由紀子

<備考>

投票総数： 130通（有効投票123通）
有効投票地域内訳： 北海道・東北12通 関東30通 中部19通
近畿30通 中国・四国・九州・沖縄32通

※得票同数の場合は、選挙管理委員会による抽選によって決定した

【役員選挙日程】

10月3日(月)：選挙台帳(案)をweb上に掲載
この間、選挙台帳(案)異議申立期間
10月24日(月)：選挙台帳確定
10月24日(月)～31日(月)：選挙台帳の作成、校正、印刷
11月14日(月)：役員選挙(会長、理事、監事)の投票用紙、選挙人名簿などの送付
12月9日(金)：投票締め切り
12月18日(日)：愛知淑徳大学星ヶ丘キャンパスにて選挙(会長、理事、監査)開票
12月19日(月)：当選者への当選及び諾否伺い
12月20日(火)：会長へ指名理事の指名依頼
12月22日(木)：被選出理事への会長指名理事の承諾依頼
12月23日(金)：会長指名理事への諾否伺い
12月26日(月)：新理事への常任理事の選出依頼
1月4日(水)：会長ならびに被選出常任理事への指名常任理事の選出依頼
1月5日(木)：指名常任理事への諾否伺い
1月6日(金)：全理事確定

【選挙管理委員会】

選挙管理委員長：小川一美(愛知淑徳大学)
事務局長：橋本 剛(静岡大学)
選挙管理委員：坂本 剛(中部大学)、平島太郎(愛知淑徳大学)

事務局からのお知らせ

常任理事(学会事務局長)
尾崎由佳(東洋大学)

名誉会員の推戴について

堀毛一也先生を当学会の名誉会員として推戴することにつきまして、2022年9月の理事会において承認され、本年度総会において推戴式が執り行われました。堀毛一也先生は会長1期と常任理事1期を務められました。これまでのご尽力に心から感謝申し上げますとともに、今後もひきつづき当学会にお力添えを賜りますこと厚く御礼申し上げます。

グループ・ダイナミックス事典について

日本グループ・ダイナミックス学会が編集する「グループ・ダイナミックス事典」(丸善出版)の刊行企画について、2022年9月の理事会で承認されました。編集委員長は山口裕幸先生(九州大学)がお務めになります。山口先生を中心に編集幹事会・編集委員会が構成され、このプロジェクトに取り組んでまいります。執筆にあたりましては、ぜひ学会員のみならずにも広くご協力いただきたいと思います。何卒ご協力のほどを宜しくお願い申し上げます。

グルダイ学会関係連絡先

本学会では、事務支局を中西印刷株式会社に開設しております。入退会、住所・所属等の変更、会費納入、機関誌等の未着・メールマガジンなどの配信先の登録・変更・停止等の連絡先として、事務支局である中西印刷株式会社までご連絡ください。

また、論文投稿先・審査書類送付先も中西印刷株式会社となっております。詳細は下記をご覧ください。各種お問い合わせの具体的な連絡先は以下の通りです。

事務支局【入退会、住所・所属等変更、その他お問い合わせ先】

日本グループ・ダイナミックス学会 事務支局
〒602-8048 京都市上京区下立売通小川東入
中西印刷 (株) 学会フォーラム内
TEL : 075-415-3661 FAX : 075-415-3662
E-mail : jgda@nacos.com

学会運営・对外業務関連

日本グループ・ダイナミックス学会本部事務局
〒112-8606 東京都文京区白山 5-28-20
東洋大学社会学部 尾崎由佳 研究室
TEL : 03-3945-4479
E-mail : sec-general@groupdynamics.gr.jp

投稿論文・学会誌編集関連【論文投稿先・審査書類送付先】

日本グループ・ダイナミックス学会 編集事務局
〒602-8048 京都市上京区下立売通小川東入
中西印刷 (株) 営業部編集校正課内
TEL : 075-441-3155 FAX : 075-417-2050
E-mail : jjesp-hen@groupdynamics.gr.jp

広報関連【ぐるだいニュースの編集・記事の投稿、メールマガジンへのニュース記事投稿、 新刊案内や研究会案内等のニュース記事、書評、公募情報など】

〒811-1313 福岡市南区日佐 3-42-1
福岡女学院大学 藤村まこと 研究室 (広報担当 常任理事)
E-mail : office@groupdynamics.gr.jp

心 理 学 評 論

Vol. 65 (2022) の発行予定

- No. 1 2022 年 9 月 一般論文
No. 2 2022 年 10 月 特集：心理学と人類史研究の接点
No. 3 2022 年 12 月 特集：伴侶動物のころを探る
No. 4 2023 年 2 月 一般論文
年間 4 冊発行し、購読料は個人予約に限り 8,000 円、機関の場合は 15,000 円です。

Vol. 64, No. 4 (2022 年 3 月発行)

論 文

榎本聖香・安達友紀・佐々木淳

慢性疼痛患者の過活動に関する研究動向

特集：マインドフルネス再考 (2) 編集：伊藤義徳・杉浦義典・佐藤 徳

伊藤義徳・杉浦義典・佐藤 徳

マインドフルネス再考 (2)

第 III 部 関連する心理療法理論から見たマインドフルネス

(1) 第 3 世代の認知行動療法

酒井美枝・武藤 崇 アクセプタンス & コミットメント・セラピー (ACT) から見たマインドフルネス

井合真海子・宮城 整・山崎さおり・松野航大・片山皓絵・成瀬麻夕・野網 恵・遊佐安一郎

弁証法的行動療法におけるマインドフルネス

今井正司 メタ認知療法から見たマインドフルネス

熊野宏昭 第 3 世代の認知行動療法の治療原理とマインドフルネス

(2) マインドフルネスと関連する心理療法

北西憲二 森田療法から見たマインドフルネス

池見 陽 フォーカシングとマインドフルネスの現状と展望

菅村玄二 構成主義セラピーから見たマインドフルネス

坂入洋右 西洋の療法と東洋の行法：科学・宗教・実践における 2 種類のパラダイム

第 IV 部 マインドフルネスの未来

佐渡充洋・二宮 朗・朴 順禮・田中智里・小杉哲平・田村法子・永岡麻貴・山田成志・藤澤大介

精神科医療およびメンタルヘルスにおけるマインドフルネス療法の意義と未来

池埜 聡 位相的観点から見通すマインドフルネスの新展開：社会正義の価値に資する方法として

国里愛彦・山本哲也 マインドフルネス研究の未来を切り開く新たな方法論

越川房子 マインドフルネスの今—そしてこれから

Vol. 65, No. 1 (2022 年 9 月発行)

論 文

折原友尊・丹野貴行 反応形成研究の現状と展望—芸術から科学へ—

椎名乾平 昔の評定尺度—古代より Likert (1932) までを中心にして—

温 若寒・三浦麻子 オンライン脱抑制：構成概念の再考と新たなモデルの提案

堀口康太 高齢者の動機研究の展望—加齢に伴う喪失的变化への適応の志向性—

鈴木浩太 注意欠如・多動症に関わる行動指標の包括的レビュー：心理学的特徴と異種性

心 理 学 評 論 刊 行 会

〒606-8501 京都市左京区吉田本町 京都大学文学部心理学研究室内

TEL: 075-753-2753 FAX: 075-753-2835

E-mail: hyoron@psy.bun.kyoto-u.ac.jp

<http://www.sjpr.jp/>

郵便振替：01080-7-1208

北大路書房

〒603-8303 京都市北区紫野十二坊町12-8

☎ 075-431-0361 FAX 075-431-9393

<https://www.kitaohji.com>(価格税込)

パーソナリティのHファクター

ー自己中心で、欺瞞的で、食欲な人たちー K. リー, M. C. アシュトン著 小塩真司監訳 四六・208頁・定価2640円 自分を利するために計算高く他人を操る、特別な地位や権利を得るに値すると自惚れている…… Hファクターの低い人々。パーソナリティのHEXACOモデルを発案した心理学者たちが、彼らに特徴的な性格傾向や行動様式を解説する。

未来思考の心理学

ー予測・計画・達成する心のメカニズムー G. エッティンゲンほか編 後藤崇志, 日道俊之, 小宮あすか, 楠見 孝監訳 A5上製・720頁・定価11000円 目標実現のための心の仕組みを人に固有の「将来を模索し判断する力」を切り口に解説。認知, 社会, 教育, 健康等の分野にも展開。

感情制御ハンドブック

ー基礎から応用そして実践へー 有光興記監修 飯田沙依亜, 榎原良太, 手塚洋介編著 A5上製・432頁・定価6160円 本邦で展開されてきた多彩な感情制御研究を一望できる書。基礎理論に始まり, 社会・人格・認知・発達・臨床・教育, さらに経済・司法・労働までの各分野における最新知見を8部31章21トピックで紹介。

エピソードで学ぶ統計リテラシー

ー高校から大学, 社会へとつながるデータサイエンス入門ー 山田剛史, 金森保智編著 A5・216頁・定価2310円 朝食を食べないと学力は低下するのか? ガチャでレアキャラが当たる確率は? 身近なエピソードや問いから統計に関する基本的な知識・スキルを学び, 数学的センスを養う。

非認知能力

ー概念・測定と教育の可能性ー 小塩真司編著 A5・320頁・定価2860円 「人間力」「やりぬく力」など漠然とした言葉に拠らず, 心理学の知見から明快に論じる。誠実性, グリット, 好奇心, 自己制御, 楽観性, レジリエンス, マインドフルネスなど関連する15の心理特性を取りあげ, 教育や保育の現場でそれらを育む可能性を展望する。

モビリティ・イノベーションの社会的受容

ー技術から人へ, 人から技術へー 上出寛子編著 A5・276頁・定価3520円 自動運転やMaaSをはじめ, 移動支援の技術の進歩と人・社会の調和について, 心理学, 哲学, 交通工学などから分析, 学際的な視座を提供する。社会的受容における多様性, 信頼や人々の幸福との関係についても議論する。

すばらしきアカデミックワールド

ーオモシロ論文ではじめる心理学研究ー 越智啓太著 四六・296頁・定価2420円 絵文字を使うやつはエロい? 連続殺人犯は目だけでわかる? 素朴な疑問を大真面目に追求した, 実在の論文を厳選。人間の行動を科学的に明らかにする心理学本来の面白さを伝えつつ, 各論文の信頼性や再現性, 関連研究を解説する。怪しい論文にだまされない留意点も収録。

Rを使った(全自動)ベイズファクタ分析

ーjs-STAR_XR+でかんたんベイズ仮説検定ー 田中敏, 中野博幸著 A5・244頁・定価3520円 フリーソフトjs-STAR_XRが拡張され, 帰無仮説検定の代替案として近年関心が高まるベイズ仮説検定に新たに対応。データ分析から結果の書き方まで懇切にガイド。巻末には半期や全7回の授業用シラバスを収載。

~~~~~  
心理学って面白そう!  
どんな仕事で活かされている?  
~~~~~

シリーズ **心理学と仕事 (全20巻) 完結!** シリーズ 監修 太田信夫
●A5判・148～232頁・定価2200～2530円

- | | | | | |
|-------------|------------|------------|-------------|----------------|
| 1 感覚・知覚心理学 | 2 神経・生理心理学 | 3 認知心理学 | 4 学習心理学 | 5 発達心理学 |
| 6 高齢者心理学 | 7 教育・学校心理学 | 8 臨床心理学 | 9 知能・性格心理学 | 10 社会心理学 |
| 11 産業・組織心理学 | 12 健康心理学 | 13 スポーツ心理学 | 14 福祉心理学 | 15 障害者心理学 |
| 16 司法・犯罪心理学 | 17 環境心理学 | 18 交通心理学 | 19 音響・音楽心理学 | 20 ICT・情報行動心理学 |

心理学概論

◎Well-Being な生き方を学ぶ心理学
大坊郁夫編

持続可能性を高め、よく生きるための
心理学入門テキスト。 2970円

はじめての発達心理学

◎発達理解への第一歩

古見文一・西尾祐美子編

基礎知識を解説し、Q&Aを交えながら
発達謎に迫る。 2420円

家族心理学

◎生涯発達から家族を問う
相良順子編

個人の発達と家族の発達の関わりを
ワークを取り入れ解説。 2530円

心の専門家養成講座④

心理支援の理論と方法

狐塚貴博・田附紘平編

複雑かつ多岐にわたる心理支援について、
実践例を交えて解説。 3520円

何のためのテスト？

◎評価で変わる学校と学び
K・ガーゲン＋S・ギル 著／

東村知子・鮫島輝美訳
教育システム変革に向けて。 2750円

PAC分析研究・実践集③

PAC分析

◎支援ツールでここまでできる
PAC分析学会編

使い方を事例から解説。 2860円

主体的に学ぶ

発達と教育の心理学

高村和代・安藤史高・小平英志編

教職課程コアカリキュラム対応テキスト。
課題・テストも掲載。 2530円

社会的子育ての実現

◎人とながり社会をつなぐ、保育力
ウンセリングと保育ソーシャルワーク

藤後悦子 監修／柳瀬洋美 他編著
支援に必要な知識とは。 2640円

家族・関係者支援の実践

◎システムズアプローチによるさまざまな
現場の実践ポイント

中野真也・吉川 悟編
新たな対人支援にむけて。 3300円

心の専門家養成講座⑥

医療心理臨床実践

◎「こころ」と「からだ」「いのち」を支える
森田美弥子・金子一史編

医療分野での心理的支援。 3300円

テストは何のためにあるのか

◎項目反応理論から入試制度を考える
光永悠彦 編著／西田亜希子 著

大学入試制度改革を考える。 3630円

やってみよう！

実証研究入門

◎心理・行動データの収集・分析
・レポート作成を楽しもう

古谷嘉一郎・村山綾編 2860円

プレゼンテーション

教育ハンドブック

◎VUCAの克服のために

中野美香 著
導入のステップを詳しく解説。 2970円

別室登校法

◎学校と適応指導教室での不登校支援
と集団社会化療法

中村恵子 著
チームを組んだ支援の方法。 2420円

地域からみる女性の

ライフ・キャリア

◎主体的に働き方・生き方を選択できる
社会の実現のために

小倉祥子 著
全国調査から分析する。 3080円

福祉心理臨床実践

◎「つながり」の中で「くらし」「いのち」を支える
永田雅子・野村あすか 編

福祉における心理支援。 3300円

なぜあなたは国際誌に

論文を掲載できないのか
◎誰も教えてくれなかった本音に必要なこと
加藤 司 著

全ての悩める研究者へ。 2970円

動かして学ぶ！はじめての

テキストマイニング

◎フリーソフトウェアを用いた自由
記述の計量テキスト分析

樋口耕一・中村康則・周景龍 著 2420円

コーチング心理学

概論〔第2版〕

西垣悦代・原口佳典・木内敬太 編著

初版以降の新たな知見をふんだんに
盛り込んで改訂。 3080円

自閉スペクトラム症者の

エピソード記憶とモニタリング

◎新たな障害仮説に向けて
山本健太 著

自閉症についての新仮説。 5280円

転職における

キャリア支援の

オートエスノグラフィ

土元哲平 著
その連の自己省察を描く。 7700円

心の専門家養成講座⑪

危機への心理的支援

窪田由紀 編

災害、事故、暴力などに遭遇した個人
や集団への支援を解説。 3300円

あなたと動物と機械と

◎新たな共同体のために
ドミニク・レステル 著／

渡辺茂・鷺見洋一 監訳／若林美雪 訳
友情と連携の哲学。 3300円

jamoviでトライ！

統計入門

◎フリーソフトウェアで始める科学
データの分析

眞嶋良全・永井暁行 編 2750円

ナカニシヤ出版

TEL 075-723-0111
FAX 075-723-0095

〒606-8161 京都市左京区一乗寺木ノ本町15
http://www.nakanishiya.co.jp/ [税込価格]